

第8回8020童話賞

一般の部 「最優秀賞」 作品

「歯痛地蔵」

そこは山のおくのおくの小さな村でありました。町のまん中から二時間バスにのってしゅうてんまでいきつくと小さな橋があります。そこが奥山というバス停です。道はふたまたにわかれています。左に曲がりゆるやかなのぼり坂を三十分歩くとやっと奥山村にたどりつきます。庄太たちの住んでいる村です。村の入り口に古いお堂があり小さなお地蔵様が立っていました。お地蔵様はいつもこの村を見守るように立っていました。庄太たちはこのお地蔵様を歯痛地蔵と呼んでいました。秋になるとお地蔵様のまわりには真っ赤なヒガンバナが咲き、あたり一面赤いじゅうたんをしきつめたようになります。すると庄太のじいさまは

「地蔵様今年もヒガンバナがきれいにさいたのう」

といて花をそなえなにやら口の中でぶつぶつ言うのでした。きっと庄太たちがじょうぶに育つようにお地蔵様をお願いしているのでしょう。

奥山村は秋がふかまると三色になります。高い山の上にある村は上の方にあるカエデやヤマウルシといった木の葉が真っ赤に色づき下の方の緑はそのままで、まん中はイチヨウやカツラの木がこがね色にかがやきます。秋の夕陽の中に三色にかがやく村の景色は庄太たちの大きなじまんの一つでした。

「今年の冬もあのときのように雪がふらないかなあ」

四年生の庄太は三年前の大雪の日の楽しかったそり遊びを思い出しながらひとりつぶやき

ました。

奥山村から太陽の昇る方をながめると、正面に村が見えます。そこが朝日村です。そうそう、さっきの奥山のバス停を右に曲がってそうとうのぼって行くと朝日村に着きます。その一番高いところに庄太たちの朝日小学校があります。庄太たちは毎日四十五分をかけた奥山村から一度山をくだり谷におりまた山をかけたのぼって反対側の山の頂上にある朝日小学校にたどり着くのです。

庄太が五年生になった夏のおわりごろのことです。ヒグラシがカナ・カナとすきとおった羽をふるわせて鳴いていました。ときどきカッコウがカ・カ・カ・カッコウと鳴きながら山の奥にとんでいきます。カッコウの鳴きまねをしていた庄太は急に上の歯が痛み出したことに気がつきました。じいさまがいつも寝る前に

「歯をみがけ、歯をみがけ」

と言っているのを思い出しました。じいさまは

「カッコウはおおちゃくもので自分でたまごをあたためないでモズの巣にたまごをうみ、モズにあたたためてもらうんだ」

「庄太カッコウのような、なまけ者になるなよ」

といつも言っていました。今年八十になるじいさまはぜんぶ歯がぬけて入れ歯になっていました。

「入れ歯になるとそうにのあじもうまくなくなるのう」

となげいていたのです。

「そうだ歯痛地蔵様をお願いしよう」

と庄太は思いました。歯痛地蔵は夕陽の中にゆったりと立っていました。

「地蔵様地蔵様どうかおらの歯痛をなおしてください」

庄太は地蔵様の前にひざまずくと一心に祈りました。祈りおわるとなんだかすこしだけ歯の痛みがやわらいだような気がしました。

次の日の昼のことです、ぐらぐらしていた歯がポロっと抜けて手のひらにのりました。さっきまでの痛みはうそのように消えています。その小さな白い歯を見てこれはきつとお地蔵様ののりやくとか言うものだと思いましたが、庄太は思いました。

「下の歯がぬけたら屋根の上になげろ上の歯がぬけたらゆか下になげろ鬼の歯のようなじょうぶな歯が生えろ」

とじいさまが歌うように言いました。

「歯をなげたらどうなるの」

と庄太が聞くと

「きつとまたはえてくるのさ」

とじいさまが言いました。庄太は白い歯をゆか下に投げこむかわりにゆか下の土をほりおこし、ていねいに埋めました。

朝日村と奥山村の野山に燃え立つような緑がもどってきました。庄太たちが六年生になったのです。小学校の子どもたちはぜんぶで八人になりました。

先生は校長先生を入れて三人です。五年生は花子と君子の二人六年生は武男と庄太の二人です。四月の初め校長先生から新しい先生のしょうかいがありました。庄太たち五・六年生を受け持つ三郎先生です。先生はこの春大学をそつぎょうしたばかりで体育がとくいだそうです。庄太と武男たちはなんだか急に大きなお兄さんができたようでもまぶしそうに三郎先生を見上げました。

「みんな右手をひらいて高く上に上げて」

「さあ今、先生がみんなの手をにぎったぞ」

「みんなも先生の手をつよくにぎれ」

「九人いっしょのあくしゅだ」

「どうぞよろしく」

と三郎先生は大声でさけびながら右手を大きくふりました。みんなもまねして先生の手をにぎったつもりで大きく手をふりました。庄太たちは本当に三郎先生の手のあたたかさがつたわってくるような気がしました。

それからの毎日はとても楽しくもありきび

しいものでもありました。

「さあおれについてこい」

といて野山をかけまわる三郎先生をおいかけるのは山でそだった四人でもたいへんなことでした。

「教室のそうじはひとりですじゅうぶんだ」

「おわったら体育館もつだえ」

五・六年生はいつも先生においまくられる毎日でした。

ある日三郎先生が話してくれました。二十年前にはこの朝日村にも中学校があっておおぜいの中学生が集まってきたそうです。村びとも今のなんばいも住んでいて秋の祭りなどはとてもにぎわっていたようです。ところが人々がだんだん町にうつり住むようになり、村の人数がすくなくなってしまうのです。

それを過疎化かそかというのだそうです。こんなに自然が豊かで美しい村を人々はなぜはなれていったのだろうか、庄太はなんだか悲しいようなやりきれない気持ちになりました。

「ぼくらは大きくなってもぜったいにこの村を離れない」

庄太は心の中で思わずそうさげんでいました。

次の日じいさまが歯痛地蔵のことを話してくれました。じいさまの子どものころはあので蔵様は「子育て地蔵」と呼ばれていたそうです。そのころは今とちがって医者も薬も少なくな子どもが生まれて間もなく死んでしまうこともあったために、人々は子どもがぶじに育ってくれることを願ってお地蔵様をおがんでいたと言うことです。子育て地蔵がいつから歯痛地蔵に変わったのか、じいさまにもそれはわからないと言うことです。そのときどきで地蔵様の呼び方も変わるんだ。庄太はまたひとつ大切なことを教えられました。

そんなある日あんなにも元気だった三郎先生が今日は朝からすっかり元気をなくしてしまいました。

「先生どうしたのなにかあったの」と花子が聞きました。

「うんじつはな、きのうからとても歯がいたいんだ」

と三郎先生は顔をしかめて言いました。

「先生かわいそう、とてもいたいのに」

と君子がしんぱいそうにそばによった。

「ぼくらは歯がいたいときは歯痛地蔵をおがむんだ」

と庄太が三郎先生に言った。

「地蔵様をおがめば本当に歯痛がなおるのか、なんだか科学的じゃないな」

三郎先生は笑いながら言った。こんどは武男が

「先生ほんとだよ、だって町まで行かなければ歯医者なんてないもの」

「町は遠いしそれに父ちゃんも母ちゃんも畑しごとでいそがしいしさ」

と言った。

「いいことがあるおらたちあした歯痛地蔵様を持ってきてあげよう、なあ庄太」

「うんそれがいいそれがいい」

と武男の言葉に庄太がうなずいた。その夜四人は武男の家に集まりました。

花子と君子がお茶を入れる大きなふくろに画用紙四まいをのりではりつけた。その画用紙に四人がかりで大きな歯痛地蔵の絵をかいた。四人が夜おそくまでがんばってかき上げた画用紙のお地蔵様はすこし笑っているように見えました。

よく朝学校に持っていくと三郎先生は

「ほほうなかなかよくかけているな、ところでなんといいっておがむんだ」

と聞きました。

「地蔵様地蔵様どうかおらの歯痛をなおしてくんさい」

と武男が言った。三郎先生は黒板のよこのけいじばんに地蔵様の絵をはると、手をあわせておごそかに

「地蔵様地蔵様どうかおらの歯痛をなおして

くんさい」

と一心に祈りました。

その夜先生は夢を見ました。歯痛地蔵様にここにこ笑いながら「こっちにやってくる夢を。」

でも朝になると歯痛はますますはげしくなりほほもすっかりはれあがってしまった。

三郎先生は、町へ出かけられる土曜日の午後までなんとかがまんした。氷で冷やされた歯ぐきはしびれて痛さも感じなくなっていた。

病院につくとお医者様は

「こんなになるまでよくがまんできたな、もうすこしでたいへんなことになるどころだよ」

と言った。

歯医者様のちりょうと薬でいたい歯もすっかりなおってまた元気な三郎先生にもどった。

ああ、あの歯痛地蔵の絵はどうなったかかって。それはね三郎先生は今でもあの絵を大切に大切に持っているよ。歯痛地蔵の絵は歯痛の時はあまりききめはないが心が苦しいときや悲しいときにはじつによくきくそうだ。地蔵様をおがんでから眠ると夢の中にやさしい地蔵様のすがたと八人の子どものたちの笑顔が浮かんできて心がいやされるんだって。

地蔵様もうれしいだろうな「子育て地蔵」「歯痛地蔵」「いやし地蔵」といっばい名前がついて。

庄太と武男は村の入り口にあるお堂の前にくるとかならず手を合わせてお地蔵様をおがみます。

「お地蔵様お地蔵様どうかぼくらの村を守ってください」

お地蔵様はいつも夕陽の中にゆったりと立ってそんな庄太と武男をやさしい笑顔で見守っているようでありました。そして金色の夕陽が西に傾きしばらくすると村はタヤみのふところの中に静かにとけこんでいきます。あ、西の空に一番星です。

